

都倉義孝著『古事記 古代王権の語りの仕組み』

森 昌 文

文字の連なりを忠実にたどることによる文脈論の方法、その読みの方が盛況であるようだ。テキストとしての古事記をどのように読むのか。書かれた古事記は天武朝とまっすぐにつながり古代王権の刻印を濃くとどめているのは事実である。文脈論的読みの方法は文体論にとどまらず、ときに王権論をもみちびきだそうとする。古事記の独自性と律令期の理念。われわれが書かれた古事記とむきあう以上、どうしても文脈論的読みの方法を捨てることはできない。問題はその読みの方法にある。また、こうもいえるだろう。他文献を閑却し、祖型・原像をかえりみず、ひとえに古事記とむきあうことが純粹な古事記をひきだせるはずなどない。古事記を「読む」とは他文献とのたえまない往還運動をとおし、かろうじてその独自性が開かれるはずであろう。独自性とは他文献との、あるいはそもそも消え入ろうとする古代との相対性のなかにこそ宿っている。「線」をみて「面」をみようとしないう直線的読みの欠陥は、あまりにもきれいに一元化した文脈論的解釈をもって王権という思想の深部にまでくい入ろうとする、その方法にある。

都倉義孝氏著『古事記 古代王権の語りの仕組み』が上梓され

た。待望の書である。既発表の多くの論文のなかから十六本をおさめ、古事記、上・中・下巻にわたる全体像を分析し、徹底して古代王権の地層部を掘りおこそうとしている。所収論文は一九七四年から一九九〇年の長きにわたる。が、その方法論は一貫して不変である。それはおおよそ次のようにまとめられるだろう。

上巻・神代の巻は始原としての原型・祖型の空間構造を提示し、王権の秘蹟を根源的に支える背骨であつて始原回帰・原型指向は同一の話型をもとめ、これを中・下巻の歴史的時系列のなかでくり返し語っていく。こうして上巻で示された原型・祖型から割り出される空間秩序は中・下巻の伝承世界においても保証され、同時に王権は時間支配をも掌握する。このとき必要なのは「語り」である。著者は「語り」の概念を二様におさえている。一、同一の語りがくり返し語られること。二、同一の語りのモチーフが異なつた語りのなかに登場し話型がくり返されること、の両点である。前者の語りはいわゆる表現様式としての口誦であり、具体的には大嘗祭における吉野の国栖の古謡や大祓・出雲国造神賀詞などの律文的祭祀表現を示す。口誦表現は一方で古代人の宗教的幻想の表出であり、一方で儀礼祭式の表出であるから両者は共生構造をもつことになり、原型・祖型としての根生いの型となつて聖なる空間秩序の再生を保有する。後者の語りは前者の語りによる話型を基本的にひき受けるので同様にして聖なる空間秩序の再生化につながり、またモチーフの異なつた話型は基層位に空間秩序を継ぎながら、しかも断絶するその相違によって時間秩序をよび込むことになる。著者は中・下巻の物語を後者の語りの方法

によつて読みといていく。

本書の立論は、こうして、両様の〈語り〉のあわいにみる即き、(空間支配)と離れ、(時間支配)の視座から王権論を展開する。語りの表現様式からおさえるのではなく、あくまで語られているモチーフの分析を主題とするのである。したがって書かれた古事記を有機的統一体とみなしつつ同時に祖型としての〈語り〉を起点とする以上、書紀・祝詞などの他文献の引用、さらには文化人類学・民俗学の諸分野の成果を踏まえながら古事記の世界を内部から浮きあがらせてみせようとする。平板な王権論に堕していないゆえんである。とくに第二章「Ⅱ 遠き代——聖性の継承と変容——」(中巻)、第三章「Ⅲ 近き代——今の代への階梯——」(下巻)にみる悲劇物語についての分析は、王権から排除される者をとおり「内なる古代」と「近代」との原質的対立にせまり刺激的である。王権における正と負の両義性、前近代と近代の歴史的断層、私と公の道義面、あるいは第四章「Ⅳ 歌謡物語論」ともあわせ「情」などの諸素をタテにヨコに織りなしながら、最終的には「人間的感動」という古事記の文学的あり方にまでおよんでいく。しかもその文学観は近代的印象批評のそれではなく、周到な古代の側の論理からみちびきだされているので実に興味深いものとなっている。著者は律令的〈制度〉と、そこからはじかれた古き共同体的成員の〈個〉の問題をからめ、重層的な王権論をしつようなまでに綴っていくのである。硬質な文体とするとく幽切れよくはこばれるその論証法は、あくまで透徹し切っている。紙幅の都合上、各論の具体的紹介は遠藤耕太郎氏(本書・書評

『古代研究』第二十九号)がきめこまかくまとめているのでそちらにゆずり、二、三の各論紹介と若干の感想を以下述べてみたい。

「Ⅰ 神代——古代王権の聖性の基盤——」ではまず「食国」の問題から入る。祖型としての〈食国〉は岡田精司の示した大化前代の「ニイナメ——ヨスクニ饗礼」に拠っている。食国とは稲を生み出す開墾された聖なる土地の謂であり、高天原の聖性に照射された領域であるとみる。「食国の政」は聖俗二重掌握の律令王権の反映とみて仁徳を「近つ世」の始まりを告げる新しき天皇像として位置づける。このとらえ方は「Ⅲ 近き代」にみる仁徳像の分析とともに著者がみちびきだした第一の成果といえるであろう。ただ大嘗祭とのかかわりから「夜の食国」が「夜の祭祀」だとするならば、どうしてツクヨミが統治しなければならぬのか、きわめて素朴な疑問がのこる。またすこし気になったのは〈葦原中国〉と〈食国〉とを等質化しているむきがあるのではないか、という点である。葦原中国は豊穡であるべき一元的聖性世界を意味するのではなく、草木言語サヤグ状態の未開性を包摂しつつ〈水〉の生成力を媒体として稲の豊穡性を保証する二元的両義的世界なのだろう。未開であり荒ぶる神の蟠踞する混沌化した世界であるからこそ王権は国譲りをせまり、稲作国家にむけこれを秩序化する正統性をもつ。たとえば神武東遷譚は〈サヤグ〉葦原中国を〈サヤケキ〉中国へ変転させる旅だったといつてよいが、この変転こそ王権による進化論的歴史観を証左する一端なのであって〈食国〉とは、葦原中国から未開性をとりのぞいた世界なのであろう。古事記の宇宙構造を考える上で、どうしても葦原中国

の意義づけは必要となるので本書の主旨からずれたが付言してゐた。次の「出雲」と「日向」というふたつの神話的舞台も葦原中国との関係位から考えなければならぬのだろう。しかしそんなささやかな杞憂はみごとにまで吹きとび、著者は卓説をひき出す。方位説を捨て出雲を伊勢とのかかわりでなく、大祓と大嘗祭の儀礼を祖型にして「日向」という名辭にむけ分析する。負の極たる出雲、正の極たる日向、それぞれ神話空間の辺境（ハシ）とする考察はすぐれていて基本的に同意できよう。

第二章以下の悲劇物語論ではサホビメ・ヤマトタケル・メトリ・カルノ太子という異端の者たちに眼を向けている。王権が本質的にかかえもつ聖なる正性と負性、その負性を負つた彼らはこの世（中心）の浄化再生のために周縁へと祓われる。彼らは賛美と鎮魂の存在であり、破滅する敗者の鮮烈な人間性によつて逆に正統が否定され、古事記の世界が超克される論理を読みとる。異端は逆転による救いが用意され、その救いは享受者たちの救いと同価とするとなえ方こそ著者独自の最終的な古事記論であり、王権論なのだと思つた。異端の者たちは王権を影から支えた犠牲者であるという論にはまったく異論ない。一点、具体的な感想を述べたい。スサノヲとヲウスにみる類似と相違を空間と時間に置換する立論は首肯できる。とくに「親」↓「天皇」というヲウスのことばの分析は、大王から天皇へという制度史的変貌を読みとる上でも重要な指摘である。しかし景行を一気に律令期における「徳目」ある天皇と位置づけるのはすこし無理なのではないか。著者の三分巻論にしたがえば徳目ある天皇をどうして中巻に置く

必然性があるのか。景行の「ねぐ」は寛容と仁慈という近代律法によるのではなくアマテラスの「詔り直し」と同様、やはり祭祀詞章のなから照射された問題として考えた方が至当なのではないか。

「近き代」における仁徳・雄略・顕宗・仁賢、各天皇像論は下巻をどのようにとらえるかという点で画期的論考群となつた。「公は私を超え」立論は下巻へのあらたな読みの地平を拓き、刮目に値しよう。とくにヲケ・オケの「公・私」の徳と情を軸としてワカタケを超えていくその論証はみごとである。息をのむように一氣に読み、そして数度読みかえし感嘆した。感嘆しながら、しかしこうも思つた。ワカタケは聖なる正性と負性（異端）を一身に浴びる古代を集約した象徴的存在である。そのワカタケの霊をヲケが包摂しつつ新しい時代の儒教的理念によつて「王権の古代は新しい王権の新しい時代相の中に内在化されてしまったことなのではないか」（三二七頁）と論ずる。律令期にみる宗教的權威と政治的權力を統括した絶対的天皇は負性（異端）を抱き込むことが不可能になり、その古代への反動的回顧がヲケ・オケの「馬飼牛飼」という下賤なる身に置くことによつて天皇を「親しき者」に引きもどした。なぜならば天皇の拠つて立つ基盤は民俗宗教の世界であり、「親しき者」でなくなつた天皇は天皇自身の存在を脅かすものであつたからだ、と著者はいふ。この論理がわかりずらかつたのは、ワカタケの霊を包摂したヲケというのであればヲケはその負性をもひき承けることになるのではないかという点である。王権にみる聖なる正と負は通時的に変容するものでは

なく負性、つまり異端性は聖俗二重権の絶対化された律令期においても祭祀原理のなかで不変的に内在化されるものであろう。くり返される祭儀は聖なる始原にたちかえることを意味するのだろ
うが、たとえば大祓や遷却崇神祭・道饗祭、さらに臨時祭の疫神祭・障神祭などの祭祀は、聖なる負性と律令王権がたえずむきあ
わなければならない緊張関係にあったことを示しているのではない
か。守り神が同時にタタリ神となりうるように。律令期の徳治
主義が〈親しき〉天皇像を遠ざける理由はよくわかるのだが、評
者の読み不足のためかこの点、いくぶん気になった。

「Ⅳ 歌謡物語論」。かつて学燈社「國文学」の座談会（昭和六

新刊紹介

箕輪吉次編

『西鶴選集 懷硯（影印・翻刻）』

本書は、西鶴没後三百年祭記念出版として行
なわれている西鶴選集の一部である。いままで
の西鶴全集と異なる点は影印本と翻刻本を同
時に提供した総合的なテキストを旨としたこ
ろにあると思われる。特に、『懷硯』の影印本は
大変少なかったのにによりも喜ばしいことで
ある。

二つのテキストの提供とともに『懷硯』の研
究を志す人に大きく役立つものは丹念な解題で
あろう。解題は、一 書誌 二 作者 三 内
容の三つの項目からなっている。一 書誌では、
現存する版本の書誌と各版本の相異点を比較し
ながら現存する三本が共に再版本であることを
明らかにしている。二の作者では、現在も意見
が相対立している『懷硯』の作者に関する論義

十三年一月号）でもその方法論が注目されたように「情の世界を王
権へ掬めとる」著者のウタとカタリに対する読みは、いまなお歌
謡物語への斬新なアプローチであること多弁を要しない。
紙幅が尽きようとしている。ここまで書いてきて、評者の浅薄
な読みにいくぶんの不安を感じる。それほどまでに本書はさまざ
まな角度から古代を考え、立体的な論理性に裏打ちされた硬質な
書になっているのである。類をみない卓越した三分巻論になった。
王権論と古代文学論、〈線〉ではなく〈面〉となって古事記がこ
こにあざやかに提示されている。

（二九九五・八 有精堂 A5判 四二二頁 七〇〇四円）

を研究史にそつて懇に叙述している。現在争点
になっている西鶴の他作品と『懷硯』との類似
については、西鶴という同一人物の作だからこ
そ生じる問題として把握している。三 内容で
は、従来言われていた町人物・武家物の習作的
なもののという否定的な評価から『懷硯』に現わ
れている時事的要素と諷刺的性格をきわめて当
世の性格を担っているものとして理解し、作品
の再評価を積極的に試みている。

このように本書は、影印・翻刻、解題を通じ
て『懷硯』を総合的に扱っている。特に解題に
おいては筆者の本作品に対する卓見と愛情が感
じられる大変有意義な本である。
（平7・11 桜楓社 A4判 影印・二三六頁・
三三〇〇円 翻刻・二〇六頁・二八〇〇円 セ
ット価六〇〇〇円 分売可）（黄 昭淵）

雲英末雄著

『古俳書雑誌』

本書は、古俳書にまつわる五篇の文章を収録

し、「こつう豆本」のシリーズの一冊として上梓
された。目次を掲げれば、「古俳書を究める」
「おくのはそ道」初版本との出会い、「弘文荘
の『古俳書目録』」、「大きな本、小さな本」、「古
俳書雑誌」さらに「附」として「早大図書館
蔵赤木文庫俳書目録」と、最後に「あとがき」
が載る。

本書書名の由来となった『古俳書雑誌』は、
本書のために新たに書きおろされたもので、『俳
諧初学抄』以下、『五條之百句』、『蛇之助五百
韻』など、著者ஞ梁蔵の貴重な俳書から十二点
を選び、本の状態や入手のいきさつなどが綴ら
れている。

また図版も効果的に添えられ、新出の安永三
年「蕪村春興帖」の挿絵や、米仲の「神奈川ぶ
ね」の原表紙など眺めていても実に楽しい。
なお、本書には並装版と特装版があり、特装
版は本書の内容に合わせ、シリーズ初の和装仕
立となっている。

（平7・11 日本古書通信社 豆本 八七頁 並
装版六〇〇円 特装版三〇〇〇円）

（伊藤善隆）